

Knock on the door



vol. 2 [氷無月・文月の扉]

1. (自分) から自分へ

カッコ良^よさには () がない。カッコ付^つけには () がある。

() の中身^{なかみ}は色々^{いろいろ}だけど、(見て欲^ほしい)、(モテたい)、(自立^{めだ}ちたい) など欲^{よく}が入^{はい}る。

カッコ付^つけは他人^{たにん}に評価^{ひょうか}されようとする。カッコ良^よさは何^{なに}も意識^{いしき}しなくても他人^{たにん}に評価^{ひょうか}される。

カッコ良^よくなるためには (欲^{よく}) をなくすことなんだよね。

() の中身^{なかみ}がなくなると、そこには不思議^{ふしぎ}と欲^ほしいもの^{おさ}が納^{おさ}まってくる。

() に欲^{よく}がつまっているうちは何^{なに}も得^えられない。

もしカッコ良^よさを得^えたいのなら、カッコ付^つけることをやめること。

() のすき間^まは心^{こころ}の余裕^{よゆう}。

カッコ付けない
自分を目指そう



2. 『まじめってカッコわるい?—高校^{こうこうせい}生のアリとキリギリス—』

僕はアリ君^{くん}。よくまじめって言^いわれる。この前^{まえ}、友達^{ともだち}のキリギリス君^{くん}の家^{いえ}に遊び^{あそ}びに行^いったら、キリギリス君^{くん}のママに『男^{おとこ}の子^こは少し悪^{わる}いくらいの方がもてるのよ』って言^いわれた。

確かにキリギリス君^{くん}はもてる。学校^{がっこう}でも腰^{こし}ばきで太^{ふと}いズボンをはいて、ワイシャツのボタンは二つ目^{ふため}まであけて、ネクタイはミノムシ^きみたい^{みみち}にぶら下がっている。先生^{せんせい}たちは彼^{かれ}をよく叱^{しか}るけど、キリギリス君^{くん}は聞^きく耳^{みみ}持^もたず。でもそれがかっこいいんだって。

キリギリス君と僕の格好は確かに全然違う。僕は町のサラリーマンみたいにきちんと制服を着て、ネクタイも上いっぱいまで締め上げている。僕はこの格好気に入っているんだけどな・・・。

あとこれはないしょの話なんだけど、キリギリス君はタバコ吸ってるんだって。そういえばこの前の授業中に、キリギリス君が枕にしていたプリント、よだれの部分が茶色に変色してたっけ。

バイクにも乗ってるらしい。『バッド・インセクツ』ってグループに入ってるんだって。僕も誘われたけど、断った。学校で禁止されているしね。

そんな僕を『面白くないやつ』って言う虫もある。けど気にはしていない。だって他人に迷惑はかけていないし、何よりも僕はそんな自分が好きだから。

キリギリス君も、僕と似たようなことを言う。『俺がやりたいことやって何が悪いんだよ。他人に迷惑かけてないし。』

ある日、悲しい知らせが届いた。隣町のアゲハママと赤ちゃんが入院した。原因は夜中バイクがうるさいせいで赤ちゃんが寝てくれなくて、ママはノイローゼになったんだって。

その時、僕は思った。『ホントにキリギリス君は迷惑かけてないのかな？』って。だから今日、思い切ってキリギリス君に言ったら、『絶交だ！』って言われた。

悲しかった。けど、僕は正しいことを言ったつもりだから・・・。

数ヶ月後、僕はキリギリス君と仲直りをした。キリギリス君は昔とは全然違う。『バッド・インセクツ』はやめたらしい。

何より違うのはその格好、一僕と同じだ。――

僕がキリギリス君に、「かっこわるくなっちゃうんじゃないの？」と聞いたら、『お前と一緒にならかっこわるくないよ』と彼は言った。

キリギリス君はまじめになった。まだ慣れないらしく、時々彼は授業中寝てしまう。けれどそんな彼を僕は心からかっこいいと思う。それにもう、彼のプリントは茶色に変色することはないのだから。